

馬込め便り

日本聖公会東京教区 大森聖アグネス教会



250 号

2025 年 4 月 27 日発行

編集・印刷：

馬込便り編集グループ

日本聖公会 東京教区 大森聖アグネス教会

管理牧師 司祭 シモン・ペテロ 上田憲明

〒143-0025 東京都大田区南馬込 1-58-8

Tel&Fax (03) 3771-3459

E メール：agnes.tko@nssk.orgホームページ：www.nssk.org/tokyo/church/oomori/

巻頭言

《あなたのドラマは悲劇？

それとも喜劇？》

管理牧師

司祭 シモン・ペテロ 上田憲明

イースターが近づいてきて、イエス・キリストの復活を祝う日の説教を考えていて、ふと思うことは、イエスが十字架につけられ殺され、神様からも人々から見捨てられるストーリーは悲劇的なのだが、復活の物語は、ひよっとするとドタバタ喜劇のようなものではないかということ。そう思ってみると、キリストの復活を報告している福音書の記事がどれもそういう風に見えてくる。これは、弟子たちが、自分を見失っていた自分を思い出し、もう一度笑ったことを記録しているのかもしれないと思えた。

私自身は、大阪で生まれ育ったせいか、子供の時から、吉本新喜劇や松竹新喜劇をテレビなどで見て育った。今回、喜劇のことを考えていたせいで、映画も含め喜劇のストーリーを幾つも思い出していた。改めて考えてみると、喜劇のストーリーは、多くの場合、不幸な出来事が起こることが多い。破産、一家離散で親子はバラバラ、幼なじみとはどうして

も親しくなれない。恋人どうしは、会えなくなり、お互いに連絡もままならなくなる。突然、慣れない土地で放浪者のように暮らさなければならぬ。強盗に襲われる。犯罪に巻き込まれる。ちよっと思い出しただけでも、喜劇の間、どちらかというといわゆる不幸なことが次から次へと起こるようなストーリーが多い。それなのに、喜劇なのである。それは、ハッピーエンドが待っているからでもあろうが、優れた喜劇ほど、そのハッピーエンドは、「それにもかかわらず、幸せを見つける」という話であることが多い。ちょうど幸せの青い鳥は、すぐ隣にいたのに、主人公の兄妹は冒険の旅に出、いろいろな大変な目に会う中で、本当の幸せとは何かを、むしろ学ぶ。そして見る目が養われて家に帰ってきて、幸せはすぐそばに、始めからずーっとあったことを発見するのである。

それを考えると悲劇か喜劇はいつも紙一重なのではないだろうか。悲劇は、不幸な状況の中で、神を、あるいは真理を見失うことであり、喜劇は、同じように不幸な状況の中で、むしろ神を、あるいは真理を発見することなのではないだろうか。

悩む人から「どうして、私にはこんな不幸なことが起こるのでしょうか？」と聞かれることがある。正解

の答は知らないが、その訴えに耳を傾け、お話を深く聞くことが出来た時は、同じ人が、「でも何か意味があるのかも知れませんか」と言い始めることがある。更に自分を笑えるようになるユーモアの感覚を発揮させる人もおられる。それを聞き、共に笑うことができる時、それは幸せを分かち合っている時なのかもしれない、と思う。

